第七十四回佛教史學會学術大会　大会シンポジウム

研究報告要旨

開催日　二〇二四年十月二十六日（土）

会場　大谷大学　慶聞館K三〇四

第七十四回佛教史學會学術大会　大会シンポジウム開催日程

日　時：二〇二四年十月二十六日（土）午後一時～四時五十分

テーマ：「寺院文献学という領域―ジャンル・対象・方法―」

■司会・趣旨説明　福井県文書館　橘　悠太

■研究報告（午後一時五分～三時十五分）

書物としての寺院文献の特色　国文学研究資料館　落合　博志

経蔵形成と聖教移動の相関について　大阪大学　中山　一麿

寺院に於ける神道文献―特に真福寺神道文献を中心に―　茨城大学　伊藤　聡

寺院所蔵資料からみる近世　武庫川女子大学　山崎　淳

■コメント（午後三時十五分～三時三十五分）　金城学院大学　舩田　淳一

■総合討論（午後三時四十五分～四時四十五分）

大会シンポジウム趣旨

本シンポジウムは、現在臨川書店から刊行中の『寺院文献資料学の新展開』（全十二巻、既刊六巻分）の編者四人によって、本叢書が目指す寺院文献研究の地方への広がり、および書物の移動に伴う「思想・文化」の「展開・変容」などに関する報告を行う。

「寺院文献」とは、寺院の歴史と共に集積され、且つ現在もなお寺内で受け継がれている歴史的文献であり、これらは寺院内部に閉ざされて存在しており、一般の目に触れることはほとんど無く、学術的にも簡単に利用できる代物では無い。しかしその実態が徐々に明らかになるにつれ、我が国の歴史・思想・文化・芸術を紐解く重要な史料の発見が相次いでおり、資料学上のフロンティアとなっていると言えよう。

我々の研究グループでは、未だほとんど調査の手が入っていない地方寺院に目を向け、幾多の寺院で経蔵全体の悉皆調査に取り組んできた。特に、複数寺院を同時に調査しているメリットを活かし、史料間の繋がりや比較、人や物の紐帯を意識した研究を目指してきた。

本シンポジウムでは登壇者それぞれの専門的見地から、仏教史学と寺院での文献調査とがどのように結びつくか、或いは今後どのような展開が期待されるかなど、仏教学と史料学とを繋ぐ「寺院文献資料学」なるものの現在地について、各々がこれまで調査してきた多くの寺院での事例を紹介し、その後の議論への布石としたい。

研究報告①

書物としての寺院文献の特色

国文学研究資料館　落合　博志

報告者はこれまで、勤務先の国文学研究資料館の業務や、科研等によって、いくつかの寺院の聖教調査に関わる機会を持った。それを通して得た知見は少なくないが、特に印象的であったことの一つは、ある場所で写された書物が遠く離れた寺院に蔵されていることがしばしばあることであった。それらは一点のみ単独で存在する場合もあれば、複数点がまとまって存在する場合もあるが、いずれにしても基本的には、書写された寺院と当該寺院を直接間接に繋ぐ何らかの背景があって持ち運ばれたものと考えられる。従って当該寺院とは別の場所で書写された聖教の存在に基づいて、僧の移動往還や寺院間の関係を推測することがある程度まで可能であろう。

今回は、高野山・醍醐寺等で書写した聖教を持ち帰った安房の宝珠院聖教や、宝珠院聖教を転写した常陸の六地蔵寺聖教の例、中世に越中で写された聖教が各地（讃岐の覚城院を含む）に伝来した例、近世に讃岐の善通寺の住持となった僧がもと居た寺院の聖教や自身の所持本を善通寺にもたらした例などを取り上げ、移動する聖教の分析を通して仏教史的問題を考える糸口を探ってみたい。

研究報告②

経蔵形成と聖教移動の相関について

大阪大学　中山　一麿

寺院経蔵内の典籍は、基本的にはその時々に目的をもって使われた実用書である。経蔵内の多くの典籍は一つ一つ独立して存在するのでは無く、ある纏まり（人・法流・ジャンル・地域性・時代性など）を背景として存在している。その纏まり毎に一つの「書群」と捉え、整理・分析することができれば、一点の貴重書を取り上げるだけでは判明し得ない様々な情報（使用目的や伝来など）を得る事が可能である。また、一つ一つの典籍が繋がりを持っているように、経蔵自体も他の寺院の経蔵と密接に結びついている。故に、一つの経蔵を調査すれば、必然的に関連する寺院の経蔵へと研究の裾野が広がっていく。

つまり、寺院所蔵の文献には、大学図書館や近代以降の蒐集家の文庫とは異なり、書物の中身の外側にも多くの歴史情報を含んでいる。そしてそれは内容の理解にも影響を及ぼす。従って、寺院の資料調査は単なる新資料の博捜だけが目的化してはならないと考えている。

本報告では、如上の観点から、寺院文献ならではの研究の可能性について言及する。

研究報告③

寺院に於ける神道文献　―特に真福寺神道文献を中心に―

茨城大学　伊藤　聡

中世の神道＝「神祇をめぐる言説」の本流を担っていたのは、顕密の僧侶たちであり、神道の教理書や秘伝書も仏教寺院において制作された。さらに彼らは、それらの伝授・相伝に当たっては、密教を模倣した「神道灌頂」のごとき儀礼作法をも考案した。つまり、神道は中世仏教の宗学の一部門として位置づけられていたのである。しかし、近世以降は、神道の主流が儒家神道や国学へと移るいっぽう、仏教系の神道は異端的なものとして批判の対象となった。さらに明治維新時の神仏分離令の結果、神仏習合的な仏教寺院の神道相承の伝統は、事実上断絶する。現在でも、開基が中世以前に遡る寺院には、中世神道に関する文献資料が残されているが、それらの多くは未だ十分な調査研究がされないままである。しかしながら、近年活発化する、研究機関や研究グループによる寺院の悉皆調査の動きのなかで、さまざまな神道文献があらたに見いだされた。このことによって中世神道の言説の諸相や儀礼・伝授作法の実態についても、より明瞭な輪郭が描けるようになってきている。

この発表では、報告者が長年共同調査を続けている名古屋大須の真福寺宝生院（大須文庫）の神道文献群を採り上げる。真福寺所蔵文献の特徴は、伊勢神道・両部神道の成立当初に遡る古写本を複数含むことで、その中には原本そのものと思われるものも含んでいる。ここでは、これらの神道文献の真福寺への伝来の経緯や、他の寺院に残る神道文献との関わり等について考察することを通じて、中世神道形成期の実態に迫りたい。

研究報告④

寺院所蔵資料からみる近世

武庫川女子大学　山崎　淳

寺院所蔵の近世資料にはどう向き合えばいいのだろうか。その厖大な数量は、調査経験者なら誰もが実感することであり、一点一点の精査を拒絶するかのようである。まして「特異な本文」や「天下の孤本」などが出現しにくい版本に至っては、関心を呼びにくい存在であるとも言える。しかし、近世は仏教がきわめて身近にあった時代であり、近世仏教を考える、仏教を通して近世を捉えようとするならば、これらの近世資料を無視はできない。寺院に眠る近世資料には、より積極的なアプローチが望まれる。

報告者は、大阪府河内長野市の九華山地蔵寺の所蔵資料の調査を進めている。地蔵寺が本格的に動き始めたのは正徳五年（一七一五）、蔵書の形成はそれ以降である。地蔵寺の所蔵資料は、まさに近世の仏教資料と言うのにふさわしい。また、地蔵寺開基の蓮体は、近世に広がりを見せていった、いわゆる新安流の祖・浄厳の直弟子である。蓮体を始発とする地蔵寺の所蔵資料は、新安流関係文献の宝庫でもある。その地蔵寺を一つのポイントとしつつ他の寺院の所蔵資料を視野に入れていくことで、一寺院にとどまらないモノや人の近世におけるつながりの復元が期待できるのである。

今回は、寺院所蔵の近世資料から見えてくる近世仏教の様相、あるいは近世資料の可能性を探り、どのような知見を得ることができるのか、報告することにしたい。